

親子で防災キャンプ 終了報告



平成29年9月23日～24日

神奈川県立愛川ふれあいの村

20家族64名の方にご参加いただき、『防災キャンプ』を開催しました。ふれあいの村に到着した子どもたちは、広い室内におおはしゃぎ、さっそく鬼ごっこなどをして遊んでいました。はじまりのつどいを終え、体をつかった遊びやじゃんけん列車などのゲームをしました。恥ずかしがりながらも、徐々に顔に笑みが浮かびます。つづいては班での自己紹介です。幼い子も一生懸命に名前と年齢を伝えます。



お弁当を食べて力をつけた後は防災ゲームです。「もし十分な食料がなかった時、周囲の被災者の側であなたはご飯を食べますか?」「清潔とはいえ避難所のトイレで用を足しますか?」などの質問にYesかNoの二択で答えます。すると、一緒に生活をしている親子でさえ答えが違うこともありました。防災ゲームでは、質問から被災した時のことを想像する時間になりました。



いよいよメインのプログラム、避難所体験です。参加者が被災し、愛川ふれあいの村に避難してきたことを想定し、一晩家族ごとで寝るための準備をします。周囲を見渡すと、しきりやドアがなくプライベートが確保されていない状態です。避難場所にある限られた資源を駆使して、知恵を絞り快適な生活空間をつくっていきます。工夫の仕方は家族それぞれ。地面からの底冷えを防ぐために、床にダンボールを重ねる家族や明かりの眩しさを考慮して屋根を作る家族も。実際に寝てみると、「思っていたよりも寝やすい!」という声がたくさん聞こえました。



夢中になって作業に没頭していた子どもたち、気がつけばお腹が空く時間です。今日の夕食は炊き出しです。豚汁とアルファ米のわかめご飯、さばの缶詰め、りんごを食べます。満身に水を使える状況ではないことを想定して、食器を洗わずに済むようにラップを巻いて食べます。ラップの上にあるご飯はすべてしまい「なかなか食べづらい」という声が多く、幼い子は不慣れなラップの上では上手に食べる事ができませんでしたが、実際に起こりうるであろう出来事を体験することができました。



その日の夜は、“家族の備えはだいじょうぶ？”と題したプログラムを行いました。実際に地震に遭ったら、“どこで家族と落ち合うのか” “どうやって連絡を取るのか” 家族で話し合います。子どもが通っている学校を集合場所に決めている家族や見える場所にメモをして、連絡手段を持とうと考えている家族もいました。被災した時の行動は各家庭それぞれですが、家族の備えがうかがえました。



日も暮れ、いよいよ寝る時間がやってきます。家とは違う場所であるため、子どもたちは不安や心細さを感じつつも、親御さんと一緒に寝床に入っていきます。21時に消灯。避難場所の明かりが消え、残る明かりは窓から差し込む外灯のみ。すぐには寝つくことができず、ダンボールにこすれる音や咳きこむ音なども聞こえてきましたが、時間とともに無事に眠りにつくことができました。普段とは違う場所で寝るというチャレンジをした子どもたち、朝起きて集まってきた時の表情は思いがけず晴れやかで、ほとんどの方がよく眠れました。一夜を過ごした場所ともお別れ、片付けの時間です。作っている時はたくさん時間がかかったのにもかかわらず、撤収するのはあっという間で、すぐにきれいになりました。



2日目のメインプログラムは、サバイバルクッキング。被災時に役立つ工夫を体験します。メニューは、非常用炊き出し袋（ハイゼックス炊飯袋）で炊くご飯とジップロックで作るトマト煮込み、切干し大根の和えものです。満身に水が手に入らない状況であっても、非常用炊き出し袋を使えば、ご飯を炊くことができます。また、調理器具を洗わずに済むようにホルトマトなどの材料をジップロックに詰めて煮込んで作りました。出来上がったら班毎に「いただきます！」非常用炊き出し袋で炊いたご飯は少し硬く、「おいしくない」とこぼす子ども中にはいました。その一方で、「実際の避難所でこのご飯が食べられたら有り難い」と口にする方もいました。



2日間を通して、普段の日常生活では感じる事のないストレスがあったことでしょうか。参加者のみなさんには、プログラムを体験することで、もしもの時に耐えることができる強さやより快適に生活するためのひと工夫を持って帰っていただけたかと思います。そして、大変な状況にもかかわらず前向きに笑って楽しむ子どもたちの力は、周囲を元気にするエネルギーになることでしょう。いつ起こるか分からない災害に対して、今回のキャンプを糧に、これからも家族で備えていただけたらとても嬉しく思います。

文責：塚原（わか）